



大方あかつき館報

第15号
2009年3月発行

あかつき

大方あかつき館（上林曉文学館）

開館十周年を振り返って

上林曉文学館協議会委員長 野並 浩

平成十年四月、緑豊かな入野の松原に囲まれ潮騒が誘う大方町（現、黒潮町）の一角に、待望の「大方あかつき館」が誕生。早いもので今年で満十周年を迎えた。

この大方あかつき館（坂本勝館長）は、いつでも、どこでも、だれでもを合言葉に学習できる複合施設（館内には上林曉文学館、図書館、レクチャーホール、町民ギャラリー、調理実習室、会議室等がある）として、町内はもとより町外の

人達にも広く利用して頂いてきた。

当時の開館の様子を高知新聞地域ワイド欄（平成十年四月中三日付）から拾い上げてみたい。

「大方あかつき館」オープン。「上林曉の遺品二百点展示」「絶筆や川端康成の書簡も」等、大きな見出しで紙面を飾っていた。そして、関係者が出席しての落成式や展示品を熱心に見詰める多くの観覧者の姿も写真入りで紹介。期待の大きさを物語っていた。

記事には、「ようこそ上林曉文学館の古里へ。幡多郡大方町の総合文化施設「大方あかつき館」が十二日、同町入野にオープンした」。

式典に参加した妹の睦子さん「東京都杉並区」は、「川端康成賞の受賞時に頂いたネックレスを身に付けて、兄と一緒に臨みました。兄は故郷を愛していましたから、地元の熱意でこんな立派な施設が建って本当に喜んでいるでしょう」と感慨深げに話されていた。

私も出席していたが、あの当時の開館を待ち焦がれた人達で溢れていた光景が、今も思い出される。

記念講演には、作家で脚本家の早坂暁さんが「四万十の沈下橋」と題して、上林文学への熱い思いを語り出席者を魅了していた。

開館第一回目の記念企画展は、上林暁・川端康成との交流と銘打って開催した。

ご承知のように、あかつき館の前には川端康成の筆による「上林曉生誕の地」の記念碑が建立されている。それについて上林さんは随想「川端さんの染筆」に、「（略）雄渾というか、墨痕淋漓というか、そんなふうな筆勢である。私はうれしい。この字によって碑が重さを加えたと思う」と胸の内を述べている。

一方、川端さんからは、「碑の文字を

書かせていただきました。まことに身のしあわせと存じました」と綴った書簡を上林さんに送っている。ありし日のノーベル賞作家の川端さんと上林さんののほのとした交流が、開館に華を添えていた。

館内には「上林暁生誕の地」の写しと共に、病床の上林さんが心の励みにしていた「明月」と書かれた川端さんから送られた条幅、それを納めた署名入りの箱も当時のまま展示されている。

開館して四年目。平成十四年十月には「上林暁生誕百周年」の記念行事が盛大に行われた。そのときの様子を左記に列挙してみる。

ここで、開館以前からご助言ご協力を頂き、また「上林暁の人と文学」を追求する「上林暁研究」を長年にわたり刊行された、吉村稠氏（前、園田学園女子大学教授）に深甚の感謝を申し述べたい。

大方あかつき館報（第九号）に、吉村氏は「上林暁、全国区へ」の一文を寄せている。それを具体的に展開するために、研究会との連携を図り大きな成果を挙げてきた。

大阪、東京、そして上林さんの生誕の地、大方町（現、黒潮町）での各研究会の案内を記す。

◆ 第一回 上林暁研究会

◎日時 二〇〇三年八月二日（土）

午後二時～

◎会場 園田学園女子大 特別会議室

◎研究発表

「戦時下の上林暁」

中村清治氏

◆ 第二回 上林暁研究会

◎日時 二〇〇四年八月七日（土）

午後一時半～

◎会場 荻窪地域区民センター

東京都杉並区

◎研究発表

「上林暁と荻窪界隈」

萩原茂氏

「天草土産」論―川端康成「伊豆の踊り子」に触れつつ―

森晴雄氏

◎対談

「兄、上林暁と私」

徳広睦子さん

◆ 第三回 上林暁研究会

◎日時 二〇〇五年八月六日（土）

午後一時半～

◎会場 大方あかつき館 会議室

◎研究発表

「上林暁・私小説の特徴」

下田城玄氏

「上林暁と大方町」

植田 馨氏

どこの会場も盛況で、熱心な話し合いが繰り広げられたそうである。

最後になったが、文学館に備え付けの観覧者ノートに入館の記念に、どうぞ・・・に記入された最近の感想をお届けする。ご一読ください。（抜粋）

・マラソンの帰りに寄りました。帰京して図書館で作品を拝見します。

・郷土でとても大切にされていることに感動しました。

・素晴らしい場所、すばらしい建物！！等々。

上林暁文学館を中心に振り返ってきた。今後文学館を拠点に、さらに「生涯学習」並びに「文化振興」の充実と発展に寄与していきたい。

図書館活動の十年

黒潮町立図書館協議会委員長 宮川 昭男

七年ほど前になるだろうか。落成後、まもなくの大方図書館の窓際で毎日のように静かに本を読んでいる一人の媼の姿があった。平成十七年、九十六歳で逝去された浦田酉先生の晩年の姿である。

私には、なんだか神々しい姿にさえ見え、酉先生にとって、近くに図書館ができてほんとうによかったなあと思ったことだった。と同時に、一人でも多くの町民が酉先生のように図書館に来て、読書の喜びを味わい、心を癒し、豊かな心を育んでほしいと願わずにはいられなかった。平成十年四月十二日、待望の大方あかつき館がオープンした。あれから十年、十八年度からは佐賀図書館も含めて、図書館活動に限ってのあゆみをふり返ってみたい。

職員は大方図書館は五名、佐賀図書館は三名、より多くの利用者の読書活動を促進する為の諸活動を一生懸命努力しており、その為、貸出冊数・入館者数ともに、おおよそ横並びといったところである。「笑顔で迎えてくれ、気持ちがいい」と

の感想が多く寄せられているが、そのことも来館者の維持、向上につながっているのかもしれない。

初年度は、やはり突出しており、貸出冊数六四〇五一冊、入館者数二八六七九人であるが、十一年度（貸出数一五七八九五冊、入館者数一二四二四四人）と十九年度（貸出数一五八〇一四冊、入館者数一二四五一二人）を比べると、十九年度がわずかだが、いずれも多くなっている。

佐賀図書館は、十九年度で貸出冊数八一七六冊、入館者数五四二〇人である。蔵書数も当初、一九五六五冊だったが、十九年度は、三五八〇八冊に増えている。佐賀図書館は、二十年三月現在一〇四一五冊である。

土曜日、日曜日に図書館に行くと、十五ある窓際の席も、中にある机も、ほぼ満席で、静かな読書風景が見られる。ふつうの日でも、幾つかの席で読書に浸っている姿がある。

両図書館の累計登録者数は、二十年三月現在六八一〇人である。

佐賀図書館は狭小、大方図書館は展示コーナーや事務室の壁面が傾斜し、館内

が見通せない受付が二つもあるなど、構造上いくつもの欠陥があるが、子ども部屋の展示や新刊書紹介コーナー・地震コーナー・郷土コーナー・ビデオ・CDコーナーなど工夫が凝らされ、利用者のニーズに応える努力の跡がみられる。

年間の事業も、毎月の「図書館だより」発行、日曜日毎の絵本の読み聞かせを中心とした「とつても日曜日」（佐賀は第一・第三金曜日）、毎年五月に行っているブックフェア、八月に開催している「夏休み映画上映会」、十二月から一月にかけて募集している「感想画コンクール」など、多彩な行事に取り組んでいる。毎年、図書館企画展にも取り組んでいるが、十九年度は十二月に劇団ブークの「手ぶくろを買いに」「くるみ割り人形」と「チェコのマッチラベル展」を開催した。特徴的な取り組みとして、図書館のボランティアアグループとして平成十三年に結成した「おはなし玉手箱」による大型紙芝居制作と上演の取り組みがある。

地域に伝わるお話を子ども達をはじめ、住民の皆さんに知ってもらい、郷土愛を育んでいただきたいという思いで始まった、この取り組みは、今や地域に根ざし



た取り組みとして定着した感があり、年間をとおして学校・地域子ども会・お年寄りのミニディ・病院など各地から数多くの上演依頼がくるようになった。

月一回例会をもち、年一作のペースで制作し、今までに、「小袖貝ものがたり」「千代の物語」「ごまじりだぬき」「上川口被爆ものがたり」「猿飼の小松さん」「掛川新吉さん」「えんこうずもう」の七作品を制作、現在、八作目に取り組んでいるところである。

七年間の歩みの中で、特に思い出深いことは、平成十四年八月、入野松原の一面の木組みの家の幻想的な灯りの下で行った「小袖貝ものがたり」上演と平成十六年三月の大方あかつき館で開催した「大方かみしばい大会」である。「大方かみしばい大会」は、それまでに完成していた三作を上演したのだが、中村や窪川からも参集してくれ、百二十名ほどの人達で会場は熱気に溢れたことであった。

それぞれの紙芝居の制作過程において、たくさんの方にお世話になり、多くの苦労や、思い出があるのだが、「掛川新吉さん」については伊田の沢田文雄さんに、

古い文献に基づいて貴重なお話をしていたくなど、特別にお世話になった。

次に、紙芝居上演後の感想の一部を紹介する。

○ ちよのものがたりが、ちよつとかなしくて、おもしろかったです。おおきなかみしばいでみやすいでした。よみかたがじょうずでききやすかったです。

(三浦小一年)

○ ちよのものがたりとごまじりだぬきがおもしろかったよ。ちよがふちにとびこんだのは、ちよつとなきそうになった。ごまじりだぬきは、ちやがまになつて、みみがくすぐったいよつていったのが、おもしろかった。

(伊田小一年)

○ 有井川のお話で「千代の物語」という紙しばいがありました。わたしは、おばあさんに、このお話を聞いていました。が、知らないこともでてきたので、またよくわかりました。おばあさんは、「千代の物語」を一番楽しみにしていたけれど、とちゅうからしかみれなかったもので、また見せてあげたいなあと思いました。また伊田小学校に来てください。

(伊田小三年)

○ 私は、「新吉さん」は、おばあちゃんから聞いたことがあったけれど、もつとくわしく知れてよかったです。新吉踊りは、新吉さんをわすれないように踊られていてということがわかりました。新吉踊りは戦争中もつづけられていて、すごいと思いました。上川口にばくだんが落とされたのも聞いていたけど、「上川口ひばくものがたり」を見て、たくさんの方が亡くなって大変だったことがわかりました。

(伊田小六年)

○ 一つの貝の模様と歴史の事実を結んで、この物語「小袖貝ものがたり」を作られた郷土の先人達の文化性に感銘致しました。また、それを掘り起こして紙芝居になさった「おはなし玉手箱」のサークルの皆様にも敬意を表します。

(四万十診療所ミニディ)

最後に今後ともさらに多くの方に「私たちの図書館」として愛され、利用していただけることを心から願って結びとします。